

田川市石炭・歴史博物館における 虫菌害防除対策事例

中川 恭子

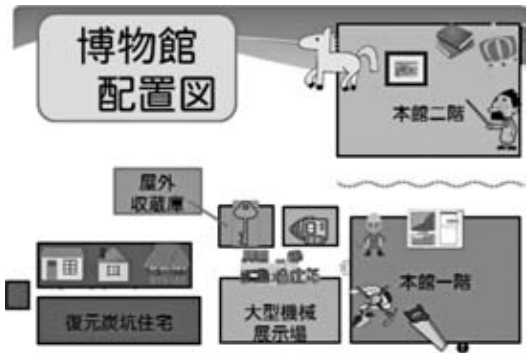
田川市石炭・歴史博物館

田川市は、福岡県のほぼ中央にあり、人口は約5万人です。三方を山々に囲まれているため、梅雨の時期には湿度が高く、冬には雪が積もるほど寒暖の差が激しい盆地特有の気候です。古く石器時代から人々の生活が営まれており、その地下深くには日本の近代化を支えた膨大な量の石炭が眠っていた地域でもあります。この石炭を産出する地域は《筑前の国と豊前の国にまたがる地域》ということで、筑豊とよばれるようになりました。

田川にあり、賑わいを見せていた大手の炭坑が昭和39(1964)年に閉山した後、二本の煙突と竪坑櫓を残してすべて取り壊され、石炭記念公園になりました。田川市石炭・歴史博物館(以下当館とする)は昭和58(1983)年にその石炭記念公園の一角に田川市石炭資料館として建てられ、炭坑や地域の歴史、エネルギーについての資料を展示・収蔵しています。延べ面積は約3,400㎡あります。二階建ての本館一階には第一展示室があり、タッチパネルや模型で炭坑のしくみや操業当時の炭坑の様子、石炭の運送方法の変遷を解説しており、坑内で実際に使用されたピックやポンプなどの道具や機械の展示もあります。



石炭記念公園の遠景



また、炭坑での生活を記録した貴重な映像も見ることができ、石炭の利用法や日本のエネルギーに関する展示も行っています。

二階には山本コレクションを展示する第二展示室の他、当館を代表する収蔵品の一つであり日本最古級で写実的な馬型埴輪や、江戸時代から伝わる伊加利地区の浄瑠璃人形が華をそえる第三展示室。石炭や炭坑に関する古い書籍を多く収蔵している図書室。収蔵室、研修室があります。屋外には今とっては貴重な炭坑の大型機械の展示場。屋外収蔵庫。炭坑住宅の変遷がよくわかると、来館者に人気の復元された明治時代から昭和時代の炭坑住宅などがあります。このように当館には多岐にわたる資料が展示・収蔵されています。

所蔵品の世界記憶遺産登録

日本の近代化を支えた産業の面影が残る当館が2011年5月に一躍日本中の注目を集めることになりました。当館所蔵の山本作兵衛炭坑記録画や日記など627点がユネスコ世界記憶遺産に日本で初めて登録されたのです。小さな市の炭坑記録画が教科書で習ったベートーベンの第9の直筆原稿やフランスの人権宣言と肩を並べ、《世界の記憶》として世界に躍り出たのです。

日本が近代化を目指した貴重な時期に、炭坑で

実際に働いていた一炭坑夫が、風俗や生活を含めた炭坑の様子を、政治などに左右されることなく、まったく個人的な記録として描がき、それを市に一括して寄贈していたことが評価を受けました。

絵を描くことが大好きだった作兵衛さんは明治25年生まれで、14歳から中小の炭坑で採炭夫や鍛冶工として働き始め、63歳からは炭坑の資材置き場で夜警の仕事につきます。絵を描き始めたのはその頃からで、亡くなる92歳まで自分の記憶と書き溜めた日記などをもとに、明治から大正時代の小さな炭坑の様子を画と余白の文で残しました。

博物館とIPM（ゼロからのとりくみ）

当館がIPMにとりくむようになったきっかけは二つあります。一つは炭坑記録画が世界記憶遺産になったこと。もう一つは九州国立博物館（以下九国博とする）の「IPM研修会への参加を呼び掛けるおしらせ」が届いたことです。これらはほぼ同時期のことでしたが、この二つには重要な関連があるということに、当時、全く気付いていませんでした。

ここ12年の間で、入館者数は少ない時で1日に2・3人のみ。最も多い時でも400人ほどでしたが、世界記憶遺産登録後は1日に1,000人を超える日が続きました。年間の入館者数は例年の約2万人から平成23年度には約15万人に急増しました。

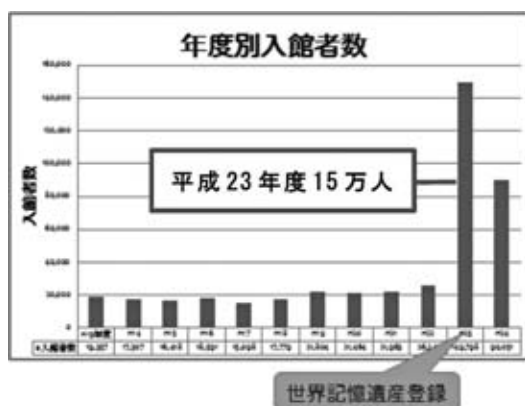
収蔵品の世界記憶遺産登録を期に、記憶遺産の保存・管理を早急に進めるため、本館の二階にあ

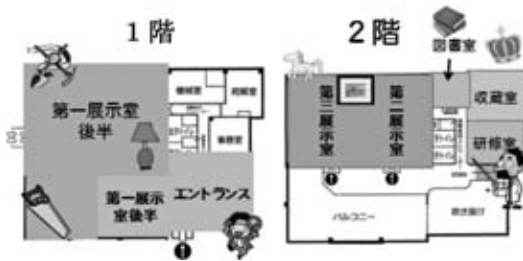
る収蔵室と第二展示室を中心に施設の改善が進んでいきました。ガラス面には紫外線カットフィルムが貼られ、第二展示室には外光をさえぎるために遮光壁が設けられました。また、ライトも全てLEDミュージアムライトに変更されました。収蔵室には外気の流入をふせぐために前室が設けられ、壁材には環境にやさしい杉を使用しました。機材も新しく購入され、データロガー、自記式温湿度記録計、除湿機、エアーカーテンによる温湿度管理もはじまりました。

時を同じくして、九国博からIPM研修の案内が届きました。気軽に参加した研修会でしたが、すでにIPMの知識を持っていたり、実践している方々がほとんどで、私にとってはゼロからというよりむしろマイナスからのスタートでした。研修会は自然散策から始まり、温湿度の読み取りやウォッチングの仕方等、必死でついていったというのが実感でした。研修が進むにつれ「薬剤に頼らない虫菌害管理なら、私にも手が届きそう。世界記憶遺産を所蔵している当館には必要不可欠なのではないか。帰ったらみんなに『IPMはみんなにもできるよ。』と、伝えたい。」という思いが強くなっていきました。

研修で体験したこと、感じたことを含め、IPMの考え方と実践方法を持ち帰り、さっそく報告会を行いました。とにかくできることから始めよう。「まずは、ウォッチング!」。しかし、本館全体1,200㎡を一度にカバーすることはできません。そこで、本館二階にある記憶遺産を収蔵する収蔵室と展示する第二展示室を最重点区域に決め、ウォッチングの区割りをすることにしました。少しずつ息の長い活動を目指し、本館を中心に5ブロックに分け、1日1ブロックを開館までの30分間に二人でウォッチングできる範囲に設定しました。週6日、5ブロックにすることで違った曜日に観察できます。

ウォッチングの後は塵をはらったりごみを回収し、ガラスをピカピカに拭きあげます。日常業務に入る前の少しの時間を利用しての取り組み、お客様をお迎えする前の「気配りメンテナンス」です。研修報告を自然に受け入れ、「自分たちの博物館がどのような状態なのか。」ウォッチング





ウォッチングの区割り

に取り組む仲間たちがいました。ウォッチングの結果はシートに書き込み、一週間分ほどをまとめて、博物館で働く全員に回覧しています。

- 展示室の隅にほこりや砂がある
- 展示物や表示、壁紙に傷みやよごれがある
- 展示ケースのガラスがくもっている
- 表示がわかりづらい
- クモの巣や虫の死がいがある

ウォッチングを始めて少し経つと、今まで気づかなかったいろいろなことが見えてきました。博物館の現状に気付いた時、初めてすべての扉が開かれた気がしました。問題点の一つずつ、できることから解決していこう。

こんなこともありました。砂の持ち込みは 来館者の急激な増加も一因でしたが、一日にちり取りいっぱい砂は多すぎます。「何が原因なのだろう。」博物館の入口から外に出てみました。周りを見回すと、タイルの上にある泥除けマットがあります。何気なくマットに目を落とした私は唖然としました。緑のゴムマットがペロリと広がっているだけでした。そのマットの緑のとげはほとんど抜け落ちていたのです。「いつからこの状態だったのだろう。」「いつも目にしてはいるはずなのに・・・」みんな、眺めてはいたけれど、心して見てはいなかったことに気づきました。さっそく新しい泥除けマットと雨天用吸水マットを購入してもらいました。思った通り砂の持ち込みは新しいマットを設置した日から半減しました。

はじめた館会議・メンテナンス

意志の疎通をはかり問題点を共有するため、休館日を利用して月に一度、博物館で働く全員が参加する博物館会議を提案し、始めました。行事な

どの連絡事項を確認した後、「最近、展示室のトラップ17番に羽虫がよくかかっています。バルコニーの戸が開きっぱなしのことが多いので、気を付けて閉めるようにしています。来館者に注意をうながすために、表示をしました。」など具体的な報告もされます。全ての人が発言することも問題解決に有効な手段でした。違った人の見方や考え方が問題に対する新しい切り口を見つけ出してくれるからです。会議の後は事務系正職員、臨時、嘱託職員が参加しメンテナンスを行います。日々のウォッチングで問題が多く緊急性がある所から大きいメンテナンスに取り組むことにしました。

博物館の日々のウォッチングとメンテナンスは回を重ねていきました。そんな中、機械類を展示している第一展示室で展示台にヒメマルカツオブシムシの脱皮殻を多く発見しました。開館以来、大きな清掃はなされていなかったのではないかと思います。脱皮殻を回収後メンテナンスをし、経過観察しましたが、やはり、数匹の幼虫を発見したため 資料をすべて移動し、再び展示台のメンテナンスを行いました。幸い金属製の展示物なので影響はありませんでしたが、他の場所に移動し繁殖されては困ります。虫類が大好きな木・接着剤・布でできた展示台の中は暗くスポットライトで程よく温められ、誰にも邪魔されることなく、居心地が良かったことでしょう。将来的に展示台の素材を改善することも検討課題の一つになりました。現在は経過観察中ですが、今のところ異常はみつかりません。

一方、建設以来16年間、大がかりな清掃が一度もされていなかった人気の復元炭坑住宅でも問題がみつかりました。昭和の住宅の押入れの中にネズミの糞や虫の死がいを多くみつけたのです。炭坑住宅の現状を報告すると、事務担当職員が2棟8軒の炭坑住宅の清掃を業者委託することで打診してくれましたが、今年度は予算がないため殺虫剤などで対応するようにとの回答でした。会議中、嘱託職員の一人が発言しました。「殺虫剤を使っても虫の死がいは残り、また虫のえさになる。どちらにせよ清掃が必要ならば、みんなでメンテナンスしましょう。」福岡の8月は30度を超える猛暑続きです。曇も全部あげての昔ながらの

大掃除は、今までに経験したことがない職員がほとんどです。大まかな指示をただけで各自が率先して、目的と手順を考えながらメンテナンスを続けました。しかも、それを楽しんでいるようにさえ見えました。2棟8軒のメンテナンスは1日で終わる仕事量ではありませんでした。作業は次の週の閉館日も続けました。きれいになっていく炭坑住宅。「この博物館はこの仲間たちが支えている。」と痛感しました。クーラーもない建物で、流れ落ちる汗を拭きながらの徹底メンテナンスを行なったあの二日間は、作業にあたった仲間たちと一体感を味わうことができた「素晴らしい思い出の二日間」になりました。

すっきりした納戸。フカフカのお布団。メンテナンス道具を片付けながら、「残業した日はここに泊まれるね。」そんな冗談も飛び交っていました。

私の思い描いていた《みんなで、たのしくIPM》が実現したときでした。

田川市石炭・歴史博物館IPMの原動力

財政的には決して潤沢な資金があるとは言えない小さな市の博物館が取り組んだ日常のIPMの一部をご紹介します。

IPMということばさえ知らなかった私たちが世界記憶遺産という財産を手にし、九国博のIPM研修に出会い、まっしぐらに進んできた二年間でした。

なぜ、石炭・歴史博物館のIPMが急速に、しかも楽しく進んでいったのか。それは人をどんどん引き付けていき、学んだ情報を自館の仲間へ伝えたい素晴らしいIPM研修プログラムにめぐりあえたから。次に、急激な来館者の増加とシステム変更に伴い、事務・受付・監視のための臨時・嘱託職員が3人から10人に大幅に増員されたことで人的余裕ができたから。そして、IPMの取り組みを「やってみたら。」と、後押しする正規職員がいたから。また、新しく加わった臨時嘱託職員が博物館が期待する職務を正確に把握し、IPMの考え方に賛同して積極的に取り組んだからだと思います。

私たちのIPMに理屈はいりませんでした。「資

料を守らなきゃ。」、「お客様に気持ちの良い空間を提供したい。」、「ガラスはピカピカが良い。」みんなの気持ちがひとつになったとき、大きな力が生まれました。

《みんなで、たのしくIPM》

これが私たちのIPMです。

ひろがれIPMのころ

「素晴らしいIPMをもっと多くの人に知ってもらいたい。」そんな思いからIPMの紹介パネルを二階のロビーに掲示しました。「できれば未来を担う子どもたちに体験してほしい。」との思いから、平成25年夏の企画展で子ども向けIPM解説シートを配布すると同時に、“Let's まもろう！文化財”と題した子供向けIPM体験教室を実施しました。当館が取り組んでいるIPMについて説明をした後、復元炭坑住宅でウォッチング開始です。クモの出現に驚いたり、ウォッチングシートと照らし合わせてトラップの回収をしたり、気づいたことをシートに記入していきます。研修室ではトラップに回収日を記入した後、ルーペや顕微鏡で観察しました。「おお～、すげえ～。」素直な感想が聞こえてきます。すっかりIPMに引き込まれていました。目をきらきらさせて帰っていくチビっ子IPM隊員を見送りながら、「準備は大変だったけど、取り組んでよかった。」と、充実感でいっぱいになりました。

これに手ごたえを感じて、子ども向けIPM解説シートはIPMパネル脇に常設することにしました。

つながれIPMのたすき

田川市石炭・歴史博物館のIPMはまだまだ道の途中です。仲間が入れ替わっても「IPMの目配り、気配りのたすきはずっと、つないでいかなければいけない。」という大きな課題もあります。しかし、“来館者にとって心地よい空間を提供する。”この共通の目標とIPMの精神を持って進んでいる限り道は続いていると思います。研修で教わった「来館者にとって心地よい空間は、資料にも環境にも、そして、そこで働く人にもやさしい。」は、私たちの日常の活動を通して感じるこ

とができました。九国博での研修の初日に博物館の周りを散策したのは、「人も環境の一部だ。」と、感じてほしいという先生方からのメッセージだったのではないのでしょうか。私たち大人は次の世代のために多くのものを守り伝えていく義務があり

ます。

その一翼を少しでも担うことができれば・・・わたしたちのIPMはまだまだ続きます。(なかがわ・きょうこ 田川市石炭・歴史博物館)



上：IPM体験教室のおみやげ
 右：子供のためのIPM解説シート
 下：子供のためのIPM紹介シート

